



Dale Pastoral Center

DPC ニュースレター

2023年6月15日 第10号

巻頭言 牧会の地平線

DPC 所員 関野 和寛



現在、私は宗教法人と関わりのない一般の病院やホスピスでチャプレンとして働いている。周りにはチャプレンと働いた経験がある医療従事者はほぼいない。患者さんたちも当然入院先に宗教者が居るとは思いもしない。統一教会の問題が取沙汰される中、私の肩身は狭く、積極的に牧師と名乗ることをしない。先生でもカウンセラーでも何でもない「あなた」、「話を聴いてくれる、あの人」になる。病室の中に入っていくために大切な事、それは検温や手先の消毒だけではなく、自分の肩書きやプライドなどは全て置いて行くことであると感じている。

患者さんが受け入れてくれれば、椅子を置いて座らせていただく。患者さんは「最近、人と話をしていない」と語る。表向きはコロナ対策による面会制限。けれども実際希薄になっていた人間関係、院内で自分の叫びを聴いてくれる人が居なかった状況が浮き彫りになったのだ。

更に耳を傾けると「生きている意味が分からない、早く死にたい」と多くの患者さんが語られる。余命宣告をされたある患者さんが「出口が見えないことが何よりも苦しい」と振り絞るように語られた。この方は「人が人生の最後に

直面する闇の景色」を教えてくれた。人生を歩んできて、病を機になすべき治療がなくなり、生きる意味、進む方向が見えなくなる。そしてその理由が分からない真っ暗闇にたった独り居ることがこの上ない苦しみののだ。私は許されれば、その闇のはじっこに一緒に居させてもらおう。そして相手の想いをひたすらに受け止め、できる限り肯定していく。何もできないが「あなたに話せて少しだけ気が楽になった……」そう言うだけでいいからそれが全てだ。

このような魂のレベルでの声を私はこれまで既存の教会では滅多に聴くことができなかった。教会内の伝統、人間関係などの囲いが、このような声を遮断していたのではないかと思う。ヨハネ福音書 10 章でイエスは囲いの中だけではなく、囲いの外にいる羊たちを導くことを語る。これは教会内外の牧会の区別を語っているのではない。牧会が人々との魂との共鳴である以上その波紋は広がり続け、その広がりの中で魂の深みに触れることができると私は信じている。正に出口のない闇の時代、救いや希望が見えなくても、一緒に迷ってくれる「あなた」が誰にでも必要なのではないだろうか。

第5回臨床牧会セミナー報告

「暗闇の中で：助けを必要とする牧会者」

2023年2月13日・14日 オンライン開催

DPC 所長 齋藤 衛

助ける者として教会に日々仕えている牧師・司祭がその働きを負いながら、困難や葛藤、行き詰まりに直面することはしばしばあるものです。そんなとき、経験している闇あるいは陰を語り合い聴き合う仲間がいる、そのような場が必要だと考えました。実は牧師も助けられる者であると知る経験によって新しい扉が開かれるのではないかという問題意識です。労苦している牧師をどう援助するのか、互いの支えをどう作るのか、その点をこのセミナーで考え受け止めたいと今回のテーマとなりました。オンラインのセミナーにありがちな一方通行ではなく、参加者が語り合い分かち合える機会の多いプログラムにしたいと企画が始まりました。

セミナー全体のファシリテーターとして三村修牧師の助けをいただきました。おかげでバランスのとれた温かなセミナーとなりました。この場をお借りして感謝申し上げます。

参加者25名（ルーテル4教会ほか3教派）、スタッフ9名（神学校教員他）でした。以下、順を追って内容をたどり、セミナー全体をご報告いたします。

Ⅰ. ホームグループ・ランダムグループ

セミナーを通して参加者が帰ってくる場として予めメンバーを決めた5-6名のホームグループを作りました。全体の場ではなかなか発言しづらいこともあるものですが、それを素直に語り合い分かち合います。また、これとは別にランダムグループとして毎回違う4名ほどのグループに分かれる時も持ちました。帰り着く仲間と新しく出会う仲間との場をそれぞれ作ったのです。

今回のセミナーでは三村牧師の考案により三つのグラウンドルール「DPC」を定めました。

D: Discipleship（無条件の肯定的関心）

お互いが神様によって創られたいのちであり、キリストの弟子として招かれた者であることを思い起こし、安心・安全な場を共に作りながら、学びや成長へとつながる時間を共に過ごしましょう。

P: Participation（自己一致）

率直な自己表現を大切にしましょう。

C: Compassion（共感的理解）

共感的傾聴を大切にしましょう。



以上の三つをまず参加者と共有し、セミナーを進めました。安心して話せる場づくりです。加えて今回のセミナーの間、互いを「〇〇先生」と呼ばないことを呼びかけました。「ファーストネームのみ」で〇〇さんと呼ぶのです。実はこれだけでも対話の気持ちがずいぶんと変わるものと経験いたしました。普段、知らぬ間につけていた鎧が解かれて、ただの私となって対話できる新鮮で不思議な感覚でした。

Ⅱ. 基調講演・発題

基調講演（後掲）はルーテル学院大学学長、石居基夫師。現代の牧会が抱える諸課題を見つめ、光への糸口を示してくださっています。

発題はお二人にお願いいたしました。日本福音ルーテル教会秋久潤牧師と、同じく日本福音ルーテル教会小勝奈保子牧師です。秋久牧師は静岡の東静地区の教会で牧師として働かれています。教会の現実に向き合いながら普段取り組む課題や考えていることを鋭い切り口で報告してくださいました。特に私たち牧師や教会の建前と本音の絡み具合から、仕える者の闇や陰の部分を指摘してくださいました。果ては社会・教会の未来予想も含めて、この現実の中で信仰の群れが生き抜く道を考えました。小勝牧師は日頃から向き合うDV相談から、社会の深刻な現実を目を向けさせてくださいました。弱

い立場の方たちがいかに傷つき苦しんでいるか。この問題に牧師や教会はどう向き合うのか、そしてその方々にいかに同伴するのか。問題提議され、光を見失いがちになる中で懸命に援助する姿を示されました。

これらの講演や発題から受け取った感想を参加者はホームグループならびにランダムグループで分かち合いました。問題意識を共有でき、それによって日頃抱える不安や荷が軽くなったとの声がありました。同労者の苦労が自分を振り返るきっかけになったとも。

III. 自由参加の時間

一日目の夜は、ファシリテーターの三村修牧師と語り合いました。

三村修さんはスピリチュアルな共同体への関心によりバングラデシュのテゼ共同体、スコットランドのアイオナ共同体へと巡礼の旅を経て、世界教会協議会ボセイ・エキュメニカル研究所（スイス・ジュネーブ）で紛争解決ワークショップと出会います。1998年、日本基督教団佐渡教会より招聘を受け現在に至ります。

「佐渡ピース・キャンプ」（非暴力トレーニング、紛争解決・平和構築のワークショップ）を2008年より毎年開催（新潟地区世界宣教委員会主催）し、特に関心は「非暴力コミュニケーション」（Nonviolent Communication [NVC] = 「共感的コミュニケーション」）の学びにあります。NVC練習会を佐渡、新潟、東京で開催。教会の合意形成やビジョン作りのワークショップ、大学生や高校生のためのワークショップ等、メディエーション（仲裁）の練習と実践に取り組まれています。

三村さん自身のこれまでの歩みと気づきを飾らぬ言葉で話してくださり、幸いな時間でした。「その人の傷を癒やすのはイエスであることの信頼が大切です」との言葉に共感した参加者の声もありました。三村修さんの歩みに聴く

ことで、自分がどこへ行こうとしている者なのか、自らの歩みを取り戻す時間となりました。

IV. 全体討議・振り返り

教会の現実、社会の現実にある闇、その解決の糸口さえ見いだせないような問題に牧師は直面せざるを得ません。闇の深さにたじろぐことがあります。ではその牧師を何が支えるのか。

ホームグループに帰って行く時、参加者はそこに仲間と分かち合えるうれしさを少なからず経験したと思います。もどかしく言葉にならない気持ちをもここでは聴いてもらえるという心持ちがあったでしょう。僅かな共有の場だとしても、話せる場に帰り、聴く仲間と出会うことがどれほど人の心に力を与えることかと知らされます。この安堵や平安を共有することが牧会に求められていると気づかされます。

この世の闇に対応する業や方法に牧師はむしろ疎いことでしょう。それらを備えることも闇を光とする働きかもしれません。ですが、そのこと以外に私たちは牧会を通して求められているものがあるはずだと思います。もっとスピリチュアルなことが基盤になるはずです。社会も人も教会もそれを求めているのです。

今回のセミナーを通じて私自身が思うのは、霊的な対話、霊的同伴への求めでした。現実的な対処を見いだせないという闇もさることながら、神のみ旨がどこにあるのか分からないことは、いっそう深い闇ではないかと思います。ならば霊的な対話を通してみ旨を聴き、そして共に祈る存在があることこそが、人をどれほど助けることか。この祈りを共にすることが牧師自身をも助けることになると思います。

ホームグループの時間をもっと持ちたかったと聞きました。闇を共有できる場への求めは切実です。DPCではこれらの声に応え、研究会やセミナーを通して霊性への問題意識を牧会者と教会に提供し貢献したいと考えています。

「暗闇の中で：助けを必要とする牧会者」

講師 石居 基夫

「光あるうちに光の中を歩め」。けれども現実には厳しい。牧会者として立たされながらも、牧師自身が深い闇の中で立ちすくみ、助けを必要としていることを思う。他教派でも私たちの教会・教団でも、牧師たちがさまざまな理由から一時的に牧会の現場を離れざるを得なくなったり、退職となったりするケースも見られる。一律に語ることはできないが、宣教・牧会の現場の厳しさを思い、その「暗闇」を考えたい。

1. 「暗闇の中」の牧会者～教会の現実

私たちが宣教の務めに召されていること。それは、神の福音を宣べ伝え、分かち合うために他ならない。「光は暗闇の中で輝いている」(ヨハネ 1:5)と言われるとおりに、牧会とはこの世の普遍的な「暗闇の中」において光を灯す務めである。すなわち、牧会者は私たちの罪や悪の現実に向かい合う者である限り「暗闇の中」にあるのは当然のことなのだ。宣教も牧会も、その働きは神ご自身の御業であり、私たちはその神の働きに用いられ、またその業に共に与るものである。どんなにその闇が深くとも、牧師は神の牧会を目の当たりにし、その証人とされていく。その意味で、暗闇の中にあつたとしても、本来、牧会者ほど恵まれた者はない。

ところが、近年私たち牧師・教会を巡る状況は大きく変化してきていて、その闇が一段と深くなってきているのではないかと思う。たとえば、1990年にはまだ牧師・宣教師の数は教会の数に比して多かったが、今では3分の2にとどまっている。このような牧師数の急激な減少のため、牧師たちは全国どこにおいても兼任・兼牧が避けられない。それによって牧会そのもの

が深刻な危機の中に立たされている。私たちは日曜日の礼拝と諸活動の中での関わりの中で牧会のために必要な情報を得たり、訪問に備えたりするのだが、多忙さはそれを妨げている。

加えて、3年にも及んだCOVID-19の影響は、それぞれの教会での活動、とりわけ食事を伴う交わりを失わせ、教会員の相互牧会の機会を減少させた。牧師は信徒の霊的ニーズをなかなか把握できず、そもそも距離を置くことが求められて、訪問は病院、施設、家庭を問わず困難になった。牧師と信徒が共に与る神の牧会そのものが成立しづらくなってしまったのである。

これは、確かに感染症による特別事態なのだが、同時に現代の私たちの生の現実が露わになっているということかもしれない。

今日「孤立する私」が常態化して、本来あるべき教会の「交わり」が成り立たず、信頼どころか関係そのものが失われている。もちろん、それぞれの地域の各教会ではこれまでどおりの小さな教会の群れが守られており、そこで長く積み重ねられてきた関係は強固に私たちを結び合わせている。けれど、決して新しい関係は切り結べないままにその交わりは次第に小さくなっていく。長くそれを担ってきた人たちがかろうじて活動を継続しているというのが実情で、世代交代は難しいし、新しい来会者はそれを担っていくほどには教会の交わりにコミットできず、おそらく期待もできない。

私たちがこの3年間に教会を守るために手にしたリモート/オンラインという手段は、ある意味で個々の信徒・求道者のニーズに伝えていくものとなったかもしれないが、この「孤立する私」の現実を打破できたとは言えず、むしろますますそれが既成事実となってしまうのかもしれない。

教会のこの現実、そこで営まれる牧会の深刻さ、困難さとなっているわけだ。これが今の社会の闇の深さということかと思う。

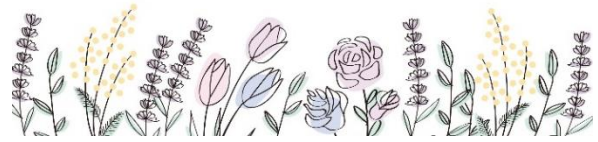
2. 牧師の抱える現代の「暗闇」

私たちの経験している暗闇とは一体何か。まず一つには現代の「生きづらさ」からくる問題の深刻さがある。2000年代になってもたらされた急速な社会変化は、人間関係のあり方を変えてきた。成果と生産性が求められる評価社会は格差を作り、あらゆるところで余裕をなくし、人間関係を引き裂き、とりわけ社会的弱者に皺寄せがきている。虐待、DV、ハラスメント、差別やいじめなど、教会の中では屈折した在り方で隠されてきたかもしれないが、夫婦、親子といった諸関係が破綻していることも決して珍しいことではない。

牧会において、私たちはこれらの複雑で深刻な問題に出会い、簡単には解決することのないままに抱え続けることになる。そしてこのようなケースでは心理、福祉、法律、あるいは警察といった外部機関の支援や連携が不可欠となってくる。重い課題に対しては、相応しい専門職との協働が必要なことは間違いない。

では、こうした現代の暗闇に関わる牧師職の専門性とは何か。この現実に入り込んでいく「神学」が十分に熟成されていないことが二つ目の問題として見えてくる。たとえば、性や結婚、家族という問題について、現代の多様性に向き合うための神学的な言葉を十分に持っているだろうか。日々格闘している牧会の現実、その諸課題を分析し、実践を批判的に検証し、そして再構築していくための神学が弱いのだ。「ジェンダー・ジャスティス」とか「ポリティカル・コレクティブネス」といった言葉が世俗/一般社会を組み替えていく言葉として力を持っているのに比して、具体的に今の私たちの教会や信仰の実践を問い、また支える神学の言葉が熟成されてきていないように思われる。

さらに言うならば、この神学の貧困ともいべきその根底のところ、そもそも「暗闇」に生きる信仰そのものが問われている。これが三



つ目の問題である。つまり、なぜキリスト教信仰なのか。それは、今の世界を生きることにどのような役割や意味を持っているのか。過去においては、先進的欧米の文化や人権・民主主義などの価値の源泉としてキリスト教が求められたかもしれないし、禁欲や他者への奉仕を謳う敬虔主義が意味をもっていたかもしれない。しかし、二つの世界大戦のみならず、環境問題、ジェンダー、人種差別の問題、植民地主義の問題などにおいて保守的役割さえも果たしてきた欧米のキリスト教は20世紀後半からその責任が問われ、限界性も指摘されてきた。日本はそもそもプルーリズム（多元主義世界）だからキリスト教信仰はすわりが悪いが、改めて「信仰の権利問題」を実感してきているのではないか。

本来は、私たちの実感しているこれらの課題に、聖書もキリスト教の伝統もしっかりと向かい合う力があるのだが、それを受け取るスピリチュアルワークとしての信仰生活、教会生活が十分に営まれていない。

以上、私たちの「暗闇」の実情を三つの視点で考えてみた。

3. 牧師が求める助けとは

こうした教会の置かれている暗闇の深淵において、牧師は日々忙しく「仕事」に追われ、「牧師である」というよりも「牧師としての働きをいかにこなすか」ということで身を粉にしている。求められることは多いが応えきれず、失敗を恐れ無難にこなすことに懸命となり、霊的にも満たされることがない。だから牧師はいつでも自分の働きも、また信仰そのものにおいても自信が持てないし、不全感を持っている。

現場の牧師たちが、暗闇の中に悲鳴をあげているのではないか。

教会も神学校もその現実に応えようと苦慮し、こうしたセミナーや研究会を企画する。しかし、牧師たちの積極的な参加を得ることは難しい。牧師にとっては、再教育とか研修とか言われると、多忙さに加えてこれ以上はできないと腰がひける。いや、そもそもこうした研修の場が、癒しや喜び、励ましを得ることよりも、何がしかの評価を受けるような感覚に陥るのではないか。研修やセミナーに参加することで自らの至らなさに気付かされる一方、そこで具体的な力や助けを得られるのかという思いもある。牧師としての正しい務めやあるべき姿を学ぶ中で、自分自身に否定的な評価を受け取ってしまうことさえあるかもしれない。

教会にはある種の規範が働いていて、信徒も牧師も毎週の礼拝と教会と信仰生活を規則正しく送り、祈りと奉仕に熱心であることが求められ、それを喜びとする明るく元気で聡明な奉仕者が評価される。弱さを見せられず、苦しく悲しい人が行きづらい場になっているのではないか。そして牧師もまたそのような価値意識や規範に縛られているのかもしれない。

だから、実際に、私たちは教会においても、あるいはこういう研修においても人の目を気にしないでいられないし、自分の問題や家族の問題といった暗闇を誰にも打ち明けることができずにいる。そこに、神の福音を分かち合う力は湧いてくるのだろうか。私たちは祈り合うことができているのではないか。互いに深く霊的に助け合えないままになっているのではないか。本当に助けがほしい人が、この場に参加することができないのではないだろうか。

本当に必要とされているのは、現場の牧師たちに対する牧会的関わりであり、支援的スーパービジョンだろう。けれども、これまで教会にはそうした経験も乏しく、作られにくいのが実

情なのだ。引退教職や経験豊富な先輩牧師がその知見から意見をする時、きっと若い牧師たちの助けになり、教会のニーズに応えるものとなるとの善意で発言されていることだろう。けれど、そのことが現場の責任を生きる牧師たちに本当に必要な支援となっているのか、よくよく考えなければならない。助けたいという意図とは別に、牧師たちをある種の評価と管理抑圧のシステムの中に身を置かしめているのかもしれないのだ。現代社会が私たちの中に染み付かせた問題かもしれない。

だとしたら、教会は本当に福音的諸関係の結び方、確かな支援となる関わりのための、知識と技術を身につけていかなければならないように思う。

自分にとって、何が問題なのか

何が必要なのか

私たちは、同じ時代に宣教と牧会の務めに生きるものとして、互いにこの管理抑圧的評価社会という仕組みから解放され、真の福音に与り、確かな支援的関係を構築し実践していくことが必要なのだと思う。牧師も信徒も現実社会に、共に生きることの本当の喜びを味わえるように、自らのうちに信仰を息づかせるスピリチュアルワークが求められる。

もちろん、そうしたことがなかなか実現できないこの今の私たちの只中においてだって、神は働かれる。神の牧会はどんなときでも起こるはずであり、拙い私たちの働きや交わりにおいてだって間違いなく福音は働いている。

しかし、私たちの内なる暗闇に必要な助けを互いに差し出し合える関係を作ることが必要なのだ。霊的にも、神学的にも、実践的にも豊かなものを作り合えるそのような交わりを私たちが始められるかが問われている。そのことが、教会の宣教と牧会をこれからの社会に対して意味のあるものとするのではないか。

神はいずこに 聖なる神秘の黙想

翻訳出版を終えて

DPC 所員 石居 基夫

*Where in the World is God?
Reflections on the Sacred Mystery*

ケネス・J・デール先生が 95 歳を超えられてまた一つの黙想の書を著されました。この 3 月に翻訳出版となりましたこの書物を、ここに改めてご紹介いたします。

デール先生は、デール・パストラル・センターにそのお名前をいただいていることはもちろん、ルーテル学院では 1982 年より 30 年間の実績を持つ「人間成長とカウンセリング研究所」の初代所長として現代を生きる私たちの心と魂のケア、そして成長のためにお働きくださいました。

現代において、私たちが神を信じるということはどういうことなのでしょう。著者のケネス・デール先生は、日本で宣教師として 45 年間働き、引退後も変わらずに「生ける神」を信じるということをつかち合いたいと願う、その自らの信仰の意味を探究し続けてこられました。本書は、そんな先生の求道の記録であり、証言と言って良いと思います。

現代を生きる私たちには、聖書とキリスト教の伝統的な教えはただそのままに受け取っていくことはたぶん難しいことなのです。確かに、父と子と聖霊の「三位一体論」、あるいはイエスは真の神であり、真の人であるという「キリスト論」といった教義は、キリスト教が何を信じているのかという道筋を示すもので、正統と異端を見分ける指標に違いないでしょう。けれども、古代世界で試みられてきたその思索探究の歩みの成果だけを手にしても、現代を生きる私たちにとってそれを理解することは容易ではありません。あるいは、キリストの十字架が、なぜ私たちにとって「救い」であるのか。そこにはもともとの古代ユダヤの宗教世界の「神信仰」の中でこそ受け止められた霊的な意味があったわけですが、そうした前提もない私たちがいきなりその救いの意味を説明されたとしても、すぐに受け入れられないのは当然のことではないでしょうか。

だからこそ、改めて、聖書に記され、私たちに伝えられてきた信仰とはどのようなものなのか

を、丁寧にたどっていかなければ私の魂に届くものにならないのです。

デール先生は、今を生きる一人の信仰者として自らのうちに「神を信じる」ということが一体何をもたらしているのかを、伝統的な神学はもちろん、新しい神学的な成果にも学びつつ、率直にご自分の実存的な経験と思索を記されています。その試みは、時にご自分が幼い時から自分のものとしてきた「日曜学校信仰」を「削ぎ落とす」ようなことだったかもしれないし、「革新的な新しい信仰上の発想の転換」(29 頁)はこれまでの神学的表現に大胆にチャレンジするものでもあったことでしょう。そのように取り組まれたからこそ、今を生きる私たちにとって、宗教というものの意味や「神を信じる」ということが何をもたらすものなのかについて示唆に富む黙想をいただけると思います。

キリスト教の信仰をお持ちの方でも、そうでなくても、この本を読まれる方は、著者が、一人の人として、キリスト教の信仰において何を求め、何を受け取ってきているのかというこの証に触れることでしょう。そうして、キリスト教ということに限らず、宗教とは何か、神を信じるということがどのようなことなのか、「誰に対しても開かれていて、同時に自分自身のものでしかない、神を求める一つの道」(12 頁)を見出されるに違いありません。



牧会の教育と実践のために、「今、もう一度」という思いで取り上げてみたい参考書の一つはヘンリ・ナウエンの『傷ついた癒し人』です。

近年、彼の著作は教派を超えてよく読まれてきましたが、それらが「身に染みてよく分かる」という人と「なるほど、こういう考え方もあるのか」という人に分かれるように思えます。つまりある人たちは、それまでの価値観や物の考え方にコペルニクスの転回が生じ、他の人たちは、そこまでは行かず、参考程度といった見方かも知れません。これは本書を読む時期（時代）や霊的ニーズの相違によるのかもしれない。牧会学の参考書としては有名なだけに書名は知っているけれど、読んだことがないという牧師も結構多いようです。

本書は1981年に邦訳出版されていますが、再版は20年ほど後になっています。おそらく高度経済成長期における成功の哲学や神学の環境の中では分かりにくかったのだらうと思います。しかし近年になって人の悩みが魂の深い領域に及んできているためでしょうか。本書も含めてナウエンの著作は多くの方々の興味と関心を集めるようになってきました。

本書は現代人の苦悩に即応した牧会や奉仕について綿密な考察がなされています。ナウエンは本書前半において、現代社会におけるミニストリーを「断絶した世界におけるミニストリー」(1章)、「根なし世代におけるミニストリー」(2章)、「希望なき人間へのミニストリー」(3章)、「孤独な牧師によるミニストリー」(4章)ととらえ、全体を包括する概念として「傷ついた癒し人」というタイトルを付けています。第4章で、その「傷ついた癒し人」に言及している一部を紹介します。「牧師は、彼の時代の苦しみを彼自身の中で知り、そして、その認識を、彼の奉仕の業の出発点とするよう召されている。……苦悩によって彼自身が傷ついていないならば、彼の業は真正なものとして受け止められないであろう。」と述べています。

これは牧師自身が自分の傷を癒しの拠り所とするという、つまり傷ついた牧師は、他者の傷を癒す業へと導かれ得るということなのです。ではその傷とは何かと言えば、疎外、離別、孤立などであり、ナウエンは「孤独」という言葉が傷を最もよく表していると言います。本書を通して牧会者は孤独というものを取り除くのではなく「尊い贈り物」であることを発見し、勇気づけられるに違いありません。どうぞ、この時代に一読、再読してみてください。 (DPC所員 堀 肇)



- 「神はいずこに 聖なる神秘の黙想」ケネス・J・デール著、谷口真理子訳・DPC監訳、キリスト新聞社、定価¥1,320(税込)

ご好評をいただき感謝申し上げます。お求めは一般書店・キリスト教書店、またはデール・パストラル・センターにご連絡ください(送料のご負担をお願いいたします)。教会での直接販売にご協力いただけましたら幸いです。

- 2023年度DPCグリーンサポート「だいじな人をなくした子どもの集まり&保護者の集まり」は以下の日程を予定しています。必要な方にぜひご紹介ください。土曜日午後1時30分～4時、7/22、9/30、11/11、1/27、3/23
またファシリテーターをお引き受けいただける方の研修会を10月に行います。お問合せをお待ちいたします。

☆編集後記☆

年2回発行のこのニュースレターが本号で第10号となりました。主イエス・キリストに示された愛を分かち合う具体的な働き(牧会=パストラルな働き)を支えるため、これからもデール・パストラル・センターは努めてまいります。

発行：日本ルーテル神学校 附属研究所 デール・パストラル・センター 発行人：齋藤 衛
181-0015 東京都三鷹市大沢 3-10-20 TEL:0422-26-4580(直通) E-mail: dpc@luther.ac.jp http://www.luther.ac.jp/